
夢見る少女と最果ての少年

クロイ名無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る少女と最果ての少年

【Zコード】

Z8572Z

【作者名】

クロイ名無

【あらすじ】

子供の頃、行方不明（住んでいっているところでは神隠しと言われている）になつた幼馴染である早瀬夏海を自分のせいだと後悔し続ける

木の木恭介

ある日、いつものように神社へ祈りに行くと、不思議な影を見る神社の中を探しても何もなく、出ようとすると突然地震が起こり、家のことが心配で外へ出ると暗闇へと落下し、気がつくと異世界へ

そしてそこには探し続けていた夏海がいた

異世界戦闘系小説

小説＆まんが投稿屋にて連載済み

プロローグ・後悔

「あのねあのね！私ね、ちよーのーりょくが使えるのー。」

……ああ、昔の夢か
「ちよーのーりょく？」

あの頃。まだ幼かつた頃。アイツが……早瀬夏海が姿を消す前
「うん！私ね、空を飛んだり、壁を通り抜けたり出来るんだよ！」
いつも変なことばかり言つてて、どこか他人とズレてて、寝るこ
とが大好きな幼馴染

「すごーい！見せて見せて！」

あまりにも変なことを言つから、学校でも友達ができず、いつも
俺と一緒にいた

「いいよー！でも、誰にも言ひちゃ駄目だよ？私と恭介君、2人だけ
の秘密！」

「うん！」

「じゃあこへよ？……えーーー！」

「…………」

「あれー？」

「どうしたの、夏海ちゃん？」

「えーーー！」

「飛べないじゃないか！夏海ちゃんの嘘つきー！」

「嘘じやないもん！昨日の夜は飛べたもん！」

「でも今は飛べないじゃないかー！」

「昨日は飛べたもん！」

「夏海ちゃんの嘘つきーもういこよー！」

昔の俺はそのまま帰つてしまつ。昔の俺の後ろでは夏海がつづく
まつて泣いている。まだ「嘘じやない。嘘じやない」と言いながら
泣いている。……けど、昔の俺はそんなことを聞きもしないで歩い
ていく

行くな

心の中で昔の自分に叫ぶ。しかし、当然のことながら昔の自分の足は止まらない。これは自分の記憶を元に作られた夢。だから足を止めるかもしない。……けど、止まつたとしてなんだというのだ。事実は変わらない。この口を悔いても、どうにもならない。それはもう十分に理解している。けれど、この夢を見るたびに叫ぶ。

行くな

叫び続ける。昔は当事者。ただ、今となつてはただの傍観者に過ぎない自分には、もうそれしかすることはない。叫び、何もできない自分を悲しみ、夢から覚め、いつもと同じ口を繰り返し、時たまこの夢を見て、叫ぶの繰り返し。ただそれだけだ。

悲しい日常

頭の真上から大きな音が聞こえてくる。普通ならありえない現象だが、今はベットに横になっている状態。俺は音の元である目覚まし時計の目覚ましを切り、上半身だけを起こすと、予想したとおり涙が流れた。周りにはもう克服したと言つてある夏海の消失。けれど、実際はこの通り。月に数回はあの夢を見て涙を流す。夏海がいなくなつたのは自分のせいかどうかは分からぬ。……いや、絶対に、あの時夏海と一緒にいれば夏海はいなくなつた。

あの日、いい加減に夏海に付き合いきれなくなり、怒つて先に帰つた後、夜になつても夏海が帰つて来ないと夏海の親に言われ、不安になり大勢で探し始めた。まだ子供だつた俺も一緒に探した。夏海の行きそうな所は全部探した。……けど、どこにも夏海はいなかつた。大人は神隠しだと言つた。この町には大きな神社があつて、俺や夏海は勿論、学校の人もよくそこで遊んだりしていた。夏には肝試しに使えるほど夜中は不気味で有名な神社。町の人は未だに神隠しなどを信じていて、そこの神社の神様が連れて行つたと言つた。俺はその時になつて、自分の行動を嘆いた。なぜ、あの時夏海を置いていつたのか。突然涙が込み上げてきて、泣いた。母に抱かれ、家に帰つてからも泣き続けた。そして泣き疲れて寝た。しかし、起きても自分のしたことを責める気持ちは治まらない。俺は神社に行き、神様にお願いした

夏海を返して下さい

勿論、そんな頼みが聞き入れられるわけがない。夏海は返つてこない。けど、今の自分に出来るのは願うことだけ。

俺は涙を拭き、制服に着替える。着替えた後にもう一度涙が出て

いないかを確かめ、目が赤くなつていなかを確かめる。もし赤くなつていたときは親にバレないよう、誤魔化す口実を考えないといけないから面倒だが、幸いにも今日は赤くなつていなうだ。

俺は荷物を入れた鞄を持って下に降り、リビングへ行った

「おはよう、父さん、母さん」

「おはよう」

「おはよう」

リビングの椅子に座つて新聞を読んでいた父さんと、朝食の最後の仕上げをしている母さんに挨拶をして席に着く。季節は夏。もうじき夏休み。……ただ、高校3年生である俺にとって、夏休みは決して楽しいことばかりではない。夏海のことでは普段から集中できていない俺は現在、志望校に行けるかどうかが怪しい。この機会にでも勉強しなければ、この不況の時代に高卒で働くなければならない。だから、この夏休みは遊ぶことは考えなによつと決めている。

俺は母に盛り付けられた朝食を食べながらテレビを見る。親には受験のためにニュースを見ていると言つてはいるが、本音では夏海の手がかりを探している。「飯を食べながらニュースを見ていいく。

【中学校に盗撮犯が現れる】【買い物帰りの主婦への轢き逃げ】【有名芸能人のスキャンダル】【連續殺人犯、とうとう捕まる】

ニュースをザツと見る。夏海に関するニュースは当然ない。今更見つかるわけがない。頭ではそう分かっていても、ニュースを見る。ニュースが中盤に差し掛かると、俺はテレビを消し、鞄を持って立ち上がる。

「行つてきます」

「いつてらつしゃい

両親に返事をして玄関を出る。外に出ると突然暑い空気に包まれる。俺はドアを閉め、一瞬止まるがすぐに歩き出す。夏になると毎年暑さで学校に行きたくなくなる。けど、行かないわけにはいかない。俺は暑さを気にしないようにしながら歩き続ける。家から学校

まで、幸いなことに坂は少ない。だから、夏のこの時期でも、そこまで体力は使わないで済む。元々運動神経だけならいい方な俺だが（それでも平均よりやや上な方だが）無駄な体力を使って、元々無いような集中力を更になくなさないでいいのは嬉しい。

俺はそのまま淡々と歩き続ける。何も考えないように勤める。夏海のことを考えると、時間がいくらかかるかも分からぬ。考える必要はない。考えていけない。

学校に着くとチャイムが鳴るまで近くの友達と話をする。昔は夏海と一緒にいたせいか友達がなかなかできなかつたが、今では仲がよい友達はいる。その人となんでもない話をする。いくら勉強がありできないと言つても、休み時間にまで勉強をする気はない。

授業が終わるとそのまま家へ帰る。友達の中には遊びにいかないかと誘つてくる人もいるけど、俺はそれを断る。流石に放課後に遊ぶ暇はない。

家に帰ると、少し休んで勉強を始める。

……そして夜中になると、俺は外へ出る。あの日から毎日していること。

神社での祈り

その神社はなぜか山の中にあつた。それも林の中に自然にできたであろう空地にポンと建物がある。無人で、賽銭箱さえない。とは言つても、昼間にはそれなりに光が届くので、遊び場所としてはもつてこいの場所。俺は手を叩き、神様にお願いする。

夏海を返して下さい

俺は基本的に神様を信じない。でも、夏海が消え、大人が神隠しだと言い、神隠しとしか思えない現状、神に祈るしかできることはない。俺は祈り終わり、目を開け、いつも通りに帰ろうとすると

え！？

建物の中に何かが見えた。無人のはずの神社に人のような影。いや、見えたのは上半身だけだから、子供の悪戯という可能性もある。けど、俺の頭の中からその考えはすぐになくなつた。その考えをなくした理由などない。ただ、数年も祈り続けて、今日、突然人のような影が見えた。それだけだけど、俺にはその影が夏海のような気がした。俺はすぐに神社に近寄り、開けた

夏海！」

しかし、そこには何もなかつた。夏海どころか、悪戯の後さえなかつた。けれど、俺は諦めきれずに中を探した。床に抜け穴はないか。壁に扉はないか。

結局、そんなものはどこにもなかつた。俺はそこに座り込んでしまつた。見間違いかもしれない。いや、確かに影が見えた。悪戯かもしれない。いや、あれは夏海だ。夏海は消えた。嫌な考え方を否定する反面、望みの可能性すら否定する。

俺はとうとう立ち上がった。そして、ここに来るのを止める決意をした。ここに来るから夏海のことを忘れない。だから幻覚なんかを見てしまう。俺は最後になるであろう神社の中を見渡した。中は特になんてことはない作り。でも、何年もこの外で祈つていたのかと思うと、ただの建物には見えない。一通り見渡し、出口の扉に手を掛けた。その瞬間

地面が揺れた

すぐに地震だと分かり、体勢を保つ。そのまま神社の中央へ。地震の揺れは長かった。しかし、構造がしつかりしているのか、神社は崩壊することなく、ホツとした。揺れが収まつても俺は数分、その場でジツとしていた。……しかし、結局はもう揺れることはなかつた。俺は親の安否が気になり、すぐに立ち上がり、扉を開け、

何もない。感じるはずの板の感触が足から伝わってこない。そう

思つた瞬間、体重を前にかけていたせいで前に倒れた。しかし、そこには地面がなく、暗闇が広がっていた

「うわあああああああ！」

落ちる。一瞬、死の恐怖を感じた。が、その落下はすぐに止まった。背中に強い衝撃を受け、気絶してしまつと引き換えに

目が覚めたときには見慣れない天井があつた。木で作られた屋根。それは自分の家と同じなのに、どこか見慣れない。そこから自分がどうなつたのかを思い出す。確か俺は神社にいたはず。その後、人の影を追いかけて中に入り、地震が起きた。そして……外に出ると落ちた。

その考えに至つた瞬間、俺は跳ね起きた。こうしてはいられない。ここはどこなんだ

「やあ、起きたんだね」

突然声が聞こえ、反射的に声の方へ向いた。そこには30代……いや、もしかしたら40代ぐらいの男が立っていた。眼鏡をかけていて、背が高く、青色の目と髪をしていた。俺が40代だと思ったのは、顔はまだ若そうなのに顔には無精ひげのようにひげが伸び、髪もボサボサでやつれて見える。白衣を着てることから医者と思えるけど、まだここがどこだから分からない。病院ならこんな木造なわけないし、俺が倒れた神社の近くには1つしか病院はない。その病院にこんな場所はない。

「何か後遺症はないかい？見たところ外傷はなく、頭にたんごぶがあつたから、頭を打つたんだろう」

……この人は何者なんだろう。そもそも、青い髪が地毛の人などいるのだろうか？もし染めているなら、医者がそんなことをするのだろうか？

「もしかして……喋れないのかい？」

俺が考え込んでいると、医者らしき男性は椅子に座り、不安そうにそう聞いてきた。どうすべきだろうか。明らかに怪しそうな男。そして状況。……けど、ここがどこだろうと、とりあえず家に帰らないといけない。

「いえ、喋れます」

「ああ、よかつた。黙つたままだから心配したよ」

その顔は本当にホッとしたようで、心から俺のことを心配していたのが分かった。とりあえず、悪い人ではなさそうだ

「あの……それでここはどこなんですか？」

「どこ? 何を言つてゐるんだ。ここはファーーティスト・アイランドだよ。」

「ファーーティスト・アイランド?」

「君は……セントラル・シティーへ行くためにこく立ち寄つたんじゃないのかい?」

「どこのことだ? ここは日本ではなくファーーティスト・アイランド。アイランドといつことは島だ。俺は日本とは違う島に来た? ……とりあえず、なんとか情報を集めないと

「あの……ここは地図のどこに位置しているんですか?」

「どこ? ……失礼だけど、やつぱり君は……頭を打つて記憶が変になつてゐるんじゃないかい?」

医者の男性はさつき以上に心配そうな顔をして俺を見てくる。…つまり、それだけこの島を知らないということは異常。これは…

…考え方を改める必要があるかもしけれない

「あの……今の自分の知識が正しいか確かめるために、今からの質問に答えてほしいんですけど」

「ああ。いいけど……」

まずは何から話そづ。……そうだな。まずは一般的な常識からだ。

「この世界で一番大きな大陸って……なんですか?」

このぐらいの知識はこの男性ぐらいの年ならあるはずだ。

「セシルムさ」

「……なら……ピラミッドや自由の女神って、分かります?」

この2つを知らない人は滅多にいないだろう。……けど、これを

知らなければ本当に考えを変えないといけない。そして

「いや、知らないな」

その言葉からも、表情からも、嘘をついてゐるとは思えない。け

ど、セシルムなんて大陸は聞いたことがない。

「…………」

「どうしたんだい？」

「どうしよう。可能性としては2つある。

1つ目は初めから俺の知識が間違っている。頭を打ったショックで、おかしくなった。

2つ目は違う世界へ来た。

「……けど、2つ目の可能性より1つ目の可能性の方がよっぽど現実味がある。頭を打つ前の俺は相当な夢想家で、頭を打つたせいで妄想と現実の認識が逆になつた。そう考えた方が自然だ。……少なくとも2つ目よりは……」

「…………まあ、君の頭がおかしくなったのかは分からぬけど、とりあえず自己紹介はしておくよ。僕の名前はアリュー。一応このファーディスト・アイランドの医者さ。もつとも、こんな老けたオッサンだけだね」

アリューと名乗った男性は俺を元気付けようとしたのか、そんなことを言つて笑っていた。それを見た俺も少しだけだけ元気になつて、作り笑いをする余裕は出きた

「よろしくお願ひします。俺の名前は…………」

「どうしたんだい？」

そこで止まつたのは名前を思い出せないからではない。俺の名前は鷺木 恭介。……けど、この男性はアリューと名乗つた。この世界が例え異世界だろうと、俺の認識が変になつただけであろうと、この世界は存在する。そしてこのアリューという名前に對して鷺木恭介といつのは明らかにおかしい気がする。

「名前……思い出せないのかい？」

けど、この男性にどう言つ?俺は違う世界から來たと言つのか?いや、それこそ俺の精神を疑われる。実際に精神異常ならともかく、あまりにも元の知識が豊富すぎる。もし単に頭を打つ前の俺が夢想家だったなら、おそらくここまで知識はないだろう。それが否応

なく可能性の1つ田を消してしまつ。だからこそ、今は敵を作るわけにはいかない。これから先、元の世界に帰る可能性を見つけるためにも、怪しまれないように、ただ、頭を打つだけ、ショックでちょっと変になつた程度に思わせないといけない

「いえ。俺の名前は……ライです」

『『ライ』。それは中学の頃、友達が付けたあだ名。『鷲木』だから『轟く』で雷。いかにも中学生……というより、中一病者が考えそうな発想。とは言つても、その名前は1田で消え去つた。だから、今思い出したのは奇跡に近い。

「そうか。ライというのか。まあ、頭が混乱しているうちは困るだろうけど、すぐに慣れるさ。セントラル・シティーに行くのだって、急ぐ必要はないだろう。どうせ決行まで後数ヶ月かかる。」

決行？

「あの。セントラル・シティには何があるんですか？何を決行するんですか？」

とりあえず今は知識がいる。混乱していると思わせたなら、何を聞いてもおそらく変には思われないだろう。なら、早めに聞けることは聞いておくに限る

「ああ、それは……。」

アリューさんはそこで言葉を止めると、何かを考え込むような仕草をしたかと思うと、逆に質問をしてきた

「その前に聞いときたいんだが、ソフィア様は分かるかい？」

「ソフィア様？」

様を付けるぐらいだから、偉い人なのだろうか？それとも神のようない存在？

「分からぬいか。」

「はい」

「ソフィア様とは……うむ、なんと言ひべきか……」

……つまり、やはり実体のない神のようなものだろう。口で説明できないといふことは、そういうことだと思つたけど……違つた

「まず、ソフィア様は数年前、突然現れた。」

「現れた？」

「そう。そして、今も生き続けている。そして　　」
そこでアリューさんは言葉を止めた。なぜなら、突然、外が騒がしくなつたからだ。

「どうしたんですか？」

「そうだつたな。今日はソフィア様の披露式の日。」

アリューさんはブツブツ言い出すと、突然「よし」と言い、立ち上がつた

「まずはソフィア様を見に行こう。そうすれば、何かを思い出すかもしれない」

アリューさんは強引に俺をベットから起こすと、そう提案した。
俺としても断る理由はないし、この人が言うソフィアというのが実体があるなら、見ておく価値はある。

そう思い、アリューさんに続いて外へ出た。外に出ると、人が村の中心に沢山集まっていた。どうやらこの家は全て木造のようだ、歴史の教科書などで見た昔の家が思い出された。家は広場のような空地を中心に、円状に家が建つていた。そして、広場を中心に、十字の形の道があり、家の区画を4つに分けていた。

俺とアリューさんは人ごみをかき分けて広場の中心へ向かうと、広場の中心には大きな建物があり、人3人分ほどの高さがあった。そしてその頂上からは水が上から建物を伝つて流れてきて、途中からその水は下の池までヴォールのように流れる。……しかし、周りの人はその噴水の水のヴォールを見るだけでソフィアと思われる人はどこにもいなかつた

「あの……ソフィアさんは？」
「もうすぐ見られるぞ」

アリューさんはそう言つと、他の人と同じように噴水の水のヴォールを眺めた。俺はどうすればいいのか分からず、ただソワソワすることしかできなかつた。しかし、数分もたつたころ、突然声が聞

こえた

「こんにちわ、皇国の諸君。」

その声は若く、アリューさんより若い男性のものようだつた。俺はその声に驚き、慌てて周りを見渡す。しかし、その中の誰も喋つているようでもなく、また、誰も驚いているようではなかつた。

「アリューさん、これはいつたい……」

「単なる放送だよ。……ほら、もう映像が出る」

映像？ そんなものを映すスクリーンなど、どこにあるというんだ？ 俺がどうしたらいいのか、何が起こっているのか分からずにはいる。突然、噴水の水のヴォールが輝きだした。しかし、その光は不思議と眩しくなく、直視してもなんともなかつた。そして、その光が収まつた瞬間、目を疑つた。

噴水の水のヴォールに映像が映されていた

その映像には先ほどの声の主であろう金色の髪の若い男性が立つていた。立つているのはどこだか分からぬが、後ろの映像は石のようで、アーチ上に作られていて、奥に通路が続いているようだ。この村の家とは作りそのものが違うようだつた。

「さて、皇国の諸君。今日は月に1度のソフィア様の披露式。時間もありませんし……貴方たちは私の顔など見たくもないでしょ。なので、堅苦しい挨拶などなしです」

男はそう喋ると後ろに下がり、何かを喋つた。すると奥の方から誰かが歩いてきた。左右に兜と鎧を着て槍を立てる護衛を従えながら、その中心に白いドレスを着て、顔には白いヴォールを着た女性。それは一見するとウェディングドレスとも見間違つようなドレスだつた。おそらく、彼女がソフィア様。そして先ほどまで喋つていた男性は深く頭を下げ、彼女たちに道を譲る。女性は先ほどまで男性が喋つていた位置まで歩くと、そのヴォールを取つた。そして……

その顔を見たとき、俺の思考は一瞬停止した。

対照的な長く黒い髪。清楚な顔立ち。そして、その表情はほとんど無表情と言つてもおかしくはなかつた。……けど、その女性は

間違いなく……夏海だつた

何年も探し続けてきた幼馴染が目の前にいた。他人の空似かもしれない。この数年で体格も成長していた。けれど、俺の直感が言つていた。あれは夏海だと。そして、女性は喋ることもせず、ただただこちらを見続け、数分後、こちらに背を向け、再び護衛を従えて歩いていった。

彼女が去っていくのと同時に、周りに集まっていた人たちも散らばり始めた。

「ライ。…………ライ！」

突然、横で叫ばれた。少しの間、夏海を見たせいでの放心で自分の新しい名前へ対応ができなかつた。

「とりあえず、家に戻ろつ

アリューさんは俺が体調を悪くしたとでも思つたのか、心配そうにそう言つと歩き出した。周りには既に俺たち以外の人の影はなく、2人だけになつていた。俺は慌ててアリューさんを追い掛けた

「それで、何か思い出したかい？」

家に着くとアリューさんはコーヒーのようなものを淹れ、俺を席に着かせた。

…………しかし、俺はどう答えるべきなのだろうか。もし俺の直感が間違つていなければ、ソフィアは夏海だ。俺の大切な幼馴染。けれど、アリューさんたちはソフィアを神様のように扱つてゐる。横目にだが、沢山いた人の中……特に老人はソフィアが現れたとき、手を合わせて拝んでいた。もしここで彼女は俺の幼馴染の夏海だなんて言つたら、どうなるか分からぬ。だから

「いえ、何も」

「そうか……」

アリューさんは自分のことのように残念そうな顔をして、ため息をついた。そして、さつき自分にも出してくれたコーヒーのような黒い液体を一口飲み、話しあした

「じゃあ、ソフィア様について教えるよ」

「お願いします」

さつきまでは軽い気持ちで聞こうと思っていたソフィアの話。……けど、もう軽い気持ちでは聞けない。少しでも多く、ソフィアのことを知らなければならぬ

「まず、ソフィア様が数年前、突然現れたのは話しただろ」「はい」

数年前、突然現れた。これはただ、俺がソフィアは夏海だと信じたい気持ちがそう思わせているのかもしれないけど、数年前、夏海は俺と同じようにここへ来た。俺にはそう思えた。……いや、それ以外は考えられない

「そして、正確にはどこにソフィア様が現れたのかは知らないけど、ソフィア様はセントラル・シティーで保護された。初めはただの迷子のソフィア様をどうするか考えていたとき、ソフィア様に関して、1つだけ分かつたことがあった」

「分かつたこと？」

「そう。ソフィア様は寝ている時、とてつもないエネルギーを生み出す。それがなんのエネルギーなのか、なぜそんなエネルギーを出せるのかは分からぬけど、セントラル・シティーの科学者はそのエネルギーを使う装置を作った。結果、さつきのような映像などの高度な機械を使うことができるようになった。ソフィア様の力は膨大で、国全体に力を供給しても有り余るほどの力だったんだ。」

夏海にそんな力があつたのは驚きだが、この世界で俺の常識は通じないと思った方がよさそうだ。この世界と俺の世界では根本的に違う、そう思うべきだろう。そう思えば、俺たちとこの世界の人の構造が違い、寝てるときに分泌される何かをこの世界の人は利用できたと考えられる

「……けど、ソフィア様だつてずっと寝てるわけじゃないでしょ？」

いくら寝るのが好きだった夏海でも、そんなにずっと眠つてはいられない。この世界がどれだけ広いのかは知らないし、夏海の力がどんなものか、どれだけ大きいのかも知らない。……けど、そんなにも長く使えるわけがない

「そう。だから、噂では強制的に眠らせてるんじゃないかなって噂が流れていた」

「……けど、それなら誰かが見に行けばいいじゃないか。会つことも許されないんですか？」

その言葉を聞いた時、アリューさんの表情が暗くなつた。俺はすぐには相當悪いことを聞かされると分かつた。俺は次にどんな言葉が来てもいいように身構える

「こんな風に発達したのは、あることが起きてからなんだ」「あること？」

「ああ。それまではソフィア様の力に頼つてはいたけど、いなくても生活できるほどだつた。……けど、ある日、どこからか現れた者たちにこの地は侵略された」

「え！？」

「彼らは圧倒的な力でこの地を攻めた後、ソフィア様を誘拐して僕たちに無条件降伏を求めた。彼らはセシルムを奪い取り、そこを拠点にした。その後、無条件降伏を受け入れた僕たちの国は生まれ変わつた。中には今の国の方がよかつたと思う人もいるけど、僕はそうは思わない」

「……どうなつたんですか？」

「彼らはソフィア様の力を僕たちにも供給して文明のレベルを上げた。ソフィア様を誘拐された時点で、僕たちは抵抗できなくなつた。けど、文明のレベルを上げ、さらにソフィア様なしでは暮らせないようになることによつて、ソフィア様の人質の価値を上げてるんだ。噂ではソフィア様の力を利用する装置も、大本はこちらが作つていたらしいが、完成させたのはあちららしい。そして、ソフィア様を月に1度見せることで、生きていることも証明している」

「……これは予想以上だ。俺は初め、夏海を見たとき、呆然としたのと同時に喜んだ。アリューさん達の様子からすぐ会えると思ったからだ。……けど、実際は全く違う。夏海は今、この俺のいる国に対立している国にいる

「あの……なんとかしてソフィア様に会う方法はないんですか？」
駄目もとで聞いてみる。もし会えるなら、とうに取り返している

だろう。攻めて来たときだけ、圧倒的な力で捻じ伏せられたと言つていた

「残念ながらないよ」

答えは予想通り。俺は俯き、拳を握る。ずっと探していた夏海。その夏海を見つけた。……けど、決して手は届かない。ようは地上から見えない星が見えるようになつただけ。見えても見えないでも、決して届かない。

「…………」

黙り込んだ俺をどう扱うのか迷つているのか、アリューさんは視線を迷わせながら言葉を選んでいる

「…………その…………」

「え！？」

アリューさんはゆつくり口を開き、言ひ難そつて口を動かし、視線を漂わせた。しかし、少しすると決意したように声を出した
「あくまで可能性なんだが……ソフィア様に会う可能性はないこともない……」

「本当ですか！」「

「ああ。…………けど、オススメはできないよ」

「なんですか！教えてください！」

例え危険なことだとしても、夏海に会いたい。そのためなら、なんでもやってやる。

アリューさんは教えるべきかどうか少しの間迷つていたが、ついには諦めたように口を開いた

「ソフィア様が誘拐されてから大体半年に一度、奪還作戦が行われる。」

「奪還作戦？…………じゃあ、もしかしてセントラル・シティーで決行されるのって！」

「そう。奪還作戦。…………だけど、僕は君にそれに参加してほしくない

い

「え！？」

「なぜ、半年のよつに行われる奪還作戦を敵国は止めないと想つ?」

「それは……」

確かにそれはおかしい。無条件降伏したのに攻めて来る敵を放つて置くのはおかしい

「彼らは……絶対の力の自信がある。攻めて来ても、勝てる自信がある。だからこそ、攻めて来るのを咎めず、ただ、攻めてきた者を皆殺しにする。そうして力関係を分からせようとしているのを」想像してみる。いくら攻撃してもビクともしない巨大な岩。それは、攻撃している間に戦意を失わせ、諦めさせる

「だから、君がいつても死んでしまうだけなんだ。なぜソフィア様に会いたいのかは分からぬけど、この方法だけはやめてほしい」アリューさんはそれだけを言つと、立ち上がって家を出て行つた。俺は……どうすべきなんだろうか。夏海に会いたい。その気持ちは変わらない。……けど、会いに行けば確実に死ぬ。なんの武術の心得のない俺が立ち向かって勝てる相手ではない。なら大人しく引くか?……いや、そんなこともできない。よつやく会えたんだ。だから……夏海と一緒に絶対に元の世界に戻る。とりあえず、明日はこの世界のことを知る。なんでもいい、とりあえず知つておいて損はないだろう。決行までまだ数ヶ月あると言つていた。

結局、その日はアリューさんの家に泊めてもうつことになつた。

起きると誰もいなかつた。上半身だけを起こして辺りを見渡しても、アリューさんもいない。昨日見た感じだと、この家に時計がないので時間は分からないうが、南向きに入り口が作られているこの家の入り口に光が斜めから差し込んでいるのが見える。おそらく、もう脣近いのだろう。

俺はベットから起き上がつた。元々この家はアリューさんの1人暮らしだ、来客用の布団、ベットなどがない。だから俺は怪我人用のベットで寝ることになった。初めはアリューさんが客人をこんなところで寝かせるわけにはいかないと言い張つたが、元々俺はここをすぐ出て行くつもりだし、アリューさんに迷惑をかけるわけにもいかないのでこっちで寝たのだ。

俺は靴を履き、外へ出る。外に出ると昨日とは違い、ほとんど人がいなかつた。俺はとにかくアリューさんを探すべきだと思い、噴水の所まで歩いた。

噴水までは近くで、家から出た瞬間にもアリューさんはいないと分かつていただけど、ここから四方に道が分かれているので、見やすいと思つてきたのだが……アリューさんの姿はどこにも見えなかつた。

「あの。アリューさんを知りませんか？」

俺はちょうど近くを通りかかった洗濯ものを抱えた主婦らしき人に道を尋ねた

「アリューさん？ 彼なら北の方の森に行つたよ」

「北ですか？ ありがとうございます」

俺はお礼を言い、主婦の人が指差さした北の森へ歩いていった。

この村は東西南北が森に囲まれている。昨日地図で見た限りではそこまで大きな島ではないが、全体では一度迷つと一度と出られそういうにじぐらいの広さはあるようだ。

昨日、アリューさんから聞いた話によれば、東の森には凶暴な動物などが住んでいて危険らしい。なぜ東にしか生息しておらず、繋がっているはずの北と南、そして村に入つてこないのかは村の人にも分かつていらないらしいが、とにかく東は危険らしい。

そして西には逆に、大人しい動物が住んでいるらしい。最も、大人しいとは言つても東に比べればという話で、危険なことには代わりはないらしい。

南の森には森らしいところはなく、森の部分が少ない。数分も歩けば船着場に着く。東西に比べれば、なんの変哲もない、しかし、最も使う森らしい。

北の森にも生物は住んでおらず、薪を拾いに行くぐらいしか行くときはないと言つていた。

アリューさんが北の森へ向かったといつことは、薪の数が減つているのだろう。

この村は俺の住んでいた所とは比べ物にならないほど原始時代の生活をしている。野菜を自分たちで育て、狩りをし、手で洗濯する。アリューさんに聞いた話だと、セントラル・シティーでは自給自足などせず、聞いた限りでは俺のいた世界と近い生活をしているらしい。

俺はアリューさんを探しに森へ入った、森は案外明るく、木々の間から日が差し込んでいる。俺は地面から出ている木の根に引っかからないように歩く。木の根などにキノコがあつたり、そこら中に枝や葉が落ちているが、これといつてなんの変哲もない森。アリューさんから聞いた通り、動物もいない。虫や鳥なら飛んでいるが、害はない。俺はそのまま歩き続けていると、開けたところにアリューさんが屈んでいるのが見えた。

「アリューさん」

「ああ、起きたのかい」

「すみません。こんな時間まで寝てしまつて」

「いや、気にすることないよ。よっぽど疲れていたんだろう

「うう」

アリコーさんはそう言って笑うと、近くにあつた茂みに近づいて調べ始めた。

「あの……何をしてるんですか？」

「ああ。昨日は言つてなかつたけど、君が倒れていたのはここなんだよ」

「え？」

「ここに……俺が倒れていた？俺は何もないのを承知の上で、辺りを見渡した。来た道にも、周囲にも、当然何もない。木ばかりの空間。

「君はちよづか、この開けた場所の真ん中辺りで仰向けに倒れていたんだ。」

「……そうですか。助けていただいて、ありがとうございます」

「いや、気にする」とじやないよ

「……でも、それでなんでここを調べているんです？」

アリコーさんは茂みを調べ終わつたのか、今度は木を調べながら話し出した

「君はこの中心辺りに仰向けに倒れてたつて言つたよね？」

「はい」

「でも、その中心まで最も近い木を使つたとしても見ての通り10メートルは確実にあるんだ」

確かに、中心までかなりの距離がある。頭にタンゴブができるいたといふことは、少なくとも頭を打つてはいる。もっと狭い場所なら木から落ちたと考えられるが、この場所では明らかに無理がある。「まあ、考えても仕方がない。とにかく、君が無事でよかつたんだから、今後は気をつければいいさ。」

アリコーさんは諦めたのか、そう言つて、こちらへ寄つて來た

「さて。僕はもう帰るけど、君はどうする？」

「……少し、ここにこちらを見て行きます」

どうして神社から落ちるところに着いたのかなんて分からぬ。けど、この辺りを探索してみる価値はあると思う。少しでもいいか

ら元の世界に帰る可能性が欲しい。夏海を取り返せたとしても、帰
れなければ意味がない

「やうか。じゃあ、僕は家で昼食を作つて待つてるよ」

そう言つとアリューさんは俺が来た道を歩き出した。俺はアリュー
さんが見えなくなるまでその後ろ姿を見送り、歩き始めた。
この場所はアリューさん調べたので、もう少し離れたところを探し
てみた。…………けど、やはりなんの変哲もない森。

「…………よし。もつと奥へ行つてみよう」

俺はそう決め、歩き出した。開けた場所からはどんどん離れてい
く。

……何分歩いただらうか。かれこれ數十分歩いた気がする。そして、ようやく今の状況がヤバイと分かつた。辺りは昼だというのに真つ暗で、夜と大差ない状態になつていて。別に突然暗くなつたわけではない。気づかないほどゆっくりと暗くなつていつた。だからこそ、奥に来過ぎたのだ。俺は急いで反転して、来た道を戻り始めた。

「…………」

しかし、一向に明るくなる気配などない。……いや、むしろ暗くなつてゐる気がする。どうしよう。今どの辺りだらうか？このまま奥に進めば帰れるだらうか？ここは島だ。真っ直ぐ行けば、いつかは海に出る。そこから太陽で方角を確認して帰るか？

ガサツ！

「！」

突然、何か音がした。茂みが揺れる音。誰かいる！？いや、もしかしたら動物かもしれない。……けど、なんでこんな所に？しかし、俺は慌てて辺りを見渡すが、どこにも何もない。いるけど暗くて何も見えないだけかもしれないが、見たところ誰もいない。俺は警戒したままさつきまで向いていた方角へゆっくり体をむき直すと

「わあ！」

そこには何かがいた。暗闇の中、更に黒い何かの影。俺は驚きの余り座り込もうとしてしまうのを堪えた。しかし、膝は震え、一步も動けなくなつてしまつ。辺りは暗いのに、更に黒い色で存在し、はつきりと認識できる。明らかにおかしい。少なくとも、普通の色ではない。いや、色ですらないとも思えるほどだ。その黒い影はその場でコラコラ揺れているだけで、害を「え」ではない。膝の震えは止まらないものの、ほんの少しだけ、考える余裕は出てきた。あれはなんのだろうか？この世界は俺の世界とは違う。魔法や靈体

などがあつてもおかしくない。そもそも、ソフィア……夏海の力だつて、俺の常識では考えられない力だ。俺は警戒しながら、震える足で少しづつ下がる。アレがなんのかは知らないが、あまり関わりになりたくない。元々ホラーが苦手な俺には精神的に毒だ。

その影は全く動かなかつた。俺が後ろに下がつてゐるのに気づいているのか、そもそも俺に気づいているのかさえ分からないが、全く動かなかつた。

……いや、動かなかつたはずだつた。

しかし、影の大きさは変わつていなかつた。大きくなることも、小さくなることもなかつた。まるで俺が動いていないかのように。俺は下がり続ける。しかし、状況は変わらない。俺の下がる速さは早くなる。……けど、何も変わらない。

しかし、変化は突然起こつた。

影が……大きくなる。小さかつた影。点とは言わないまでも、何の影だか分からぬほどの小さな影がどんどん大きくなる。それは人の影のようだつた。丸い頭の影に胴体のような影。そして4本の太い棒状の影。もしかしたら人ではないかもしれない。けれど、俺の頭に人以外でこの影と重なるものはない。俺は余計に怖くなり、ついには動けなくなつた。例えば人の影として、なぜ影が暗闇ではっきりと見える？ 例えば人の影ではなかつたとしたら、あれはなんだ？ 答えの出ない問いが頭を巡る。その間にも影はどんどん近づく。

ついには目の前にまで來た。影の大きさは俺よりも少し低いぐらいの大きさ。横に長いわけでもなく、逆に細すぎるぐらいだつた。影は俺の方を見た。……いや、見たように見えた。見上げたのかどうかすら分からなかつた。ただ、ほんの少し影が動き、見上げたような気がした。少しの間、俺と影は見つめ合つていた。目の見えない黒い影。俺は頭が恐怖でいっぱいになりながらも、なんとか逃げる方法を考えていた。頭の中で決して逃げられないと思いながらも、考えた。

そして、俺の考えが出るまでに行動を起こしたのも、影だった。影は俺の脇を通り過ぎると、そのまま歩いていく。危機は去った。頭の中でそう思った。あの影に害はない。俺はホッと息をつき、倒れこみそうになつた瞬間

ビクッ！

体が跳ねた。理由は分からなかつたが、元凶は分かつた。歩き去つて行つていたはずの影が立ち止まり、こちらを見つめている。さつきはなかつた悪寒に似た感覚。あんなに近くで見たときは正体不明のものに対する恐怖しか感じなかつたのに、それより遠くに離れた状態で見つめられただけで悪寒に似た感覚を感じる。自然と歯がぶつかり、力チ力チと鳴る。そうこうしている間に影は手を伸ばしていく。届くはずはない。自分からから……影から離れたのだから。けど、今の俺にとつては、どれだけ離れていても届くような気がした。影は手の形をした影を肩辺りまで上げると、停止した。もしそれが人なら、まるで助けを求めているような仕草。しかし、俺は近づかなかつた。単純に怖かつた。俺はそのまま後退しようとして

「ア、ア、ア、ア、」

影が呻いた。その声は苦しげで、何かを求めるようだつた。俺は後退しようとした足が止まつた。影に口などない。けれど、その呻き声は影が出したとしか思えなかつた。俺は知らず知らずに足を前に出していた。異からぬ。この世界では何があるか分からぬ。……けれど、苦しんでいるのを見捨てられなかつた。あの日、夏海を見捨ててしまつた日から、もう一度と自分の前で誰かが苦しんでいるのを見たくなかつた。あいかわらず足は震えていたが、自分から影に近づいた。

「ど、どうしたんだ？……なんでそんなに苦しそうなんだ？」

恐怖で震えてうまく言葉が喋れない。けれど、震える口でなんと

か喋つた。

「ア、ア、ア、ア、」

しかし、影は呻くだけで、依然と手を差し伸べてくる。俺は躊躇

つた。もし掘めば、いきなりどこかへ引きづり込まれるかもしれない。

……けど、俺は掘んだ。

やつぱり見捨てておけなかつた。例え相手が正体不明のものでも、見捨てられなかつた。掘んだ瞬間、景色が消えた。……いや、正確には、闇が消えた。目の前がグニャツと歪んだかと思うと、暗闇が吸い込まれるように消えていった。俺は突然明るくなつた光景に目が開けられなくなつた。

「くっ！」

何も見えず、再び暗闇となつた。しかし、今度の暗闇は瞼の裏の光景。俺は次第に目が開けられるようになり、ゆっくりと目を開けた。

すると、そこには湖があつた。田の前に湖。その中央には祭壇のようないい建物があり、そして背後と左右には森。まるでさつきまで迷つていた森を抜けたみたいだ。俺は歩いて湖に近づいた。湖を覗くと、自分の顔が写つた。鏡に反射されるかのように、はつきりと映つた。普通ではありえないほど綺麗な湖。そしてその湖にある祭壇は、ここから見えるだけでも綺麗だつた。まるでここは時間が止まつてゐるかのように、汚れがなかつた。もしかしたら村の誰かが整備しているのかもしれない。そんな考えが頭をよぎつたが、すぐにそれはありえないことだと理解した。ここは森の中であり、木は沢山ある。なのに、湖には葉が一つも浮かんでいない。いくらなんでもおかし過ぎる。しかし、不思議と恐怖はなかつた。まるでここはそういう場所なのだと、頭で納得しているようだつた。もしかしたら驚きの連続で理解が追いついていないだけなのかもしれないが、今の俺にとつてはどうでもいいことだつた。

俺は祭壇を眺めた。形はまるでピラミッド。しかし、三角形の頂点は平らで、中途半端な三角形だつた。そしてここから見える正面に何段もの階段が湖から伸びて頂上へ続き、その両端はなだらかな坂となつていて。それはいくつもの石を積み上げてではできないほどで、一つの巨大な石を削つて作られた物のようだつた。

そして、そこでようやく気づいた。影がない。俺は辺りを見渡す。背後、森、湖、祭壇。どこにもいない。俺は森に入った。もしかしたら、森にいるのかもしれない。森を歩く。森の中は初めてのようだ。明るく、見通しが利く。俺は辺りを見渡しながら歩く。しかし、

影はどこにもいない。とうとう、森を抜けてしまった。俺は仕方ないと諦め、そのまま村に帰るとして……足が動かなかつた。

田の前には湖と祭壇があつたからだ。さつきと変わらない状態でそこについた。俺は確かに真つ直ぐ進んだはず。しかし、ここへ出てきてしまった。俺はすぐに振り返り、走つた。辺りを見るなんてことをせず、真つ直ぐ走つた。すぐに森を抜けた。しかし、目の前には依然として湖と祭壇が現れる。俺はその場に座り込む。……いや、正確には崩れ落ちた。ゲームなどで迷いの森などという場所がある。俺は今、そこにいる。そうとしか考えられなかつた。俺は放心状態寸前でなんとか心を食い止めた。ここで放心しても意味はないと思つたからだ。その瞬間、目に光が飛び込んできた。正確には、見ている方向の先で何かが光つた。その光は祭壇の頂上からきていた。

「なんだ……あれば……」

初めに見たときは見えなかつた。いや、そもそも大きさ的に見えず、たまたま今回は光が反射しただけなのかもしれない。俺は光を手で防ぎながら、ゆっくりと湖に近づく。あの光がなんのかは分からぬ。……けど、今はあそこにしか可能性はない。俺は湖に入る。湖は思つた以上に浅く膝程度の深さしかなかつた。俺は安心し、ザブザブと進んでいく。だが、その安心もすぐ不安へ変わつた。祭壇に近づくに連れて、どんどん深さが増していった。足は侵食され、腰まで侵食され、ついには首まで侵食された。目算で祭壇まであと5メートル。しかし、思つた以上に水を含んだ服は重く、水の抵抗も手伝つて上手く進めない。

なんとか祭壇まで着いた時には息が切れ切れで、その場を動けなかつた。息が整うのにどのくらい時間を使つたのかは分からない。けど、明らかにずいぶん時間が経つていて。いつ頃から変化していつのつか気づかなかつた。いや、もしかしたら、突然変化しのかもしれない。とにかく、辺りが真つ赤に染まつていた。オレンジではなく、赤。空を見上げると、赤い太陽が輝いていた。改めて、ここが

俺の知つてゐる場所ではないことを知る。……いや、アリューさんたちのいる村でさえ、太陽は俺の知つてゐる色だつた。けれど、こゝは違つた。俺は未だに疲れてゐる体に鞭を打ち、起き上がつた。息は既に整つてゐた。問題は体力。思つた以上に湖を進むのに体力を奪われた。

俺は起き上がり、祭壇を見上げた。近くで見るとその巨大さが分かる。頂上が見えないほどとは言わないまでも、登る気をなくすには十分過ぎるほどの高さがある。一体、誰が何の目的でここを作り、影はここへ連れてきたのかは分からぬ。けど、俺には今、この祭壇を登るしか希望は残されていない。

俺は階段に足をかけ、昇つて行く。そして疲れたら休む。どれくらい時間が経つたのかは分からぬ。昇つてるとき、もしくは休んでいるときに突然、もしくはゆっくりと世界が暗くなつたり、明るくなつたり、赤くなつたり、青くなつたり、白くなつた。規則性があつたのかもしれないけど、疲れている俺にはそんなことを考える余裕なんてなかつた。ただ、暗くなつたときだけ止まる。それだけを守り昇る。途中から上は見ないようにした。もし上を見れば挫けるかもしれないから。

そしてとうとう、俺は昇りきつた。俺は最後の一段を倒れこみながら踏んだ。体力は限界。湖を渡つたとき以上の疲れが体を支配する。倒れている間、視界の端で何度も色が変わつた気がする。もちろん、疲れていた俺に確かなことは分からぬ。

30分ほど経つた頃、ようやく動けるようになつた。もちろん、時計などないので感覚だが、そのぐらい経つた気がした。

俺は立ち上がり、初めて頂上の景色を見た。まず初めに目に写つたのは輝く剣だつた。実際に輝いていたのかは分からぬ。けど、光を反射するほど汚れのついていない刃。そして、この剣には鍔がなかつた。更には、柄までもが鉄でできているかのように輝いてゐる。……いや、もしかしたら、柄などなく、全てが刃であるのかと疑うほどだつた。しかし、近づいてみるとやはり柄はあり、銀色の

木刀を両刃にしたような感じだった。それが頂上の中央辺りに刺さっていた。俺は改めて辺りを見渡す。頂上は平らで、剣以外は何もない。瓦礫や葉すらなかったし、地面もひび割れすらなかった。まるでつい最近作られたかのような作り。俺は端の方へ行き、森を見る。森はどこまでも続き、村は見えなかつた。

「さて……どうするか……」

ここに昇ればなんとかなるかと思つたが、そうではなかつた。あつたのは剣だけ。……いや、何かはあつてくれたと思うべきか。人工作物があるということは、一度は誰かがここへ来たことがあるということ。……あるいはあの影がここへ来たことがあるのかもしれない。だとしたらなぜ影はここへ連れてきたのだろうか。剣を俺に渡すため？考えられるのはそのぐらい。確かに今の俺には剣は必要なかもしない。夏海を取り返すためにも必要になるだろう。けど、影がなぜそのことを知つている？いや、もしかしたら、他に理由があるのかもしれない。

考えても結局は分からぬ。俺はもう一度景色を見た。とりあえずあるのは剣だけ。俺は結局、剣の柄を握つた。せっかく昇つたのだから、降りるにしても剣だけは持つていかないとただの骨折り損だ。俺は剣を思いつきり引つ張つた。……しかし、思ったより深く刺さつているのか、片手では抜けない。俺は両手で掴み、思いつきり持ち上げる。その瞬間、さつきまで抜けなかつたのが嘘のようになり抜け、仰向けに倒れてしまつ

「いて……」

俺は剣を片手で持ち、ぶつけた部分を摩りながらもう片方の手にある剣を見て、驚いた。剣が錆びていついていたのだ。手で握つている部分から徐々に輝きを失うように、ゆっくりと。俺は驚きの余り剣を投げ捨てた。剣は地面にあたり金属音がしたが、錆び付くのは止まらない。そしてとうとう、剣の全身が錆び付き、さつきまであつた光輝く剣はそこにはなかつた。あるのは錆びた、今にも折れそうな剣。俺はゆっくり剣に近づき、持ち上げた。手が錆びることな

んて、当然ない。握る前まではそのことを恐れたけど、そんなことはなかつた。剣は重く、片手で振ることは難しそうだつた。長さは俺の身長より短く、漫画などで見る一般的な剣と同じぐらい。違うのはやはり鎧がないことぐらい。俺はズボンのベルトを外し、剣と一緒に体に巻きつけた。長さはギリギリ足りて、うまく剣を固定できた。別に錆びた剣などいらないけど、なんとなく、このまま捨てていつたらここまで来た意味がない気がしたのでとりあえず持つて降りる。降りるときは昇るときと違い、楽に降りられた。聞いた話では昇りより下りの方が体力を使つらしげが俺は下りの方が楽に感じる。

階段の真ん中あたりで初めて認識の甘さを感じた。この祭壇は湖に囲まれていたのだ。剣を背負つていらない状態でも苦労したのに、剣を背負つている状態で渡れるのだろうか？不安に思いながらも、降りるしか道はない。頂上へ行つても、もう何もない。ついに一番下まで降り、目の前に湖が広がつた。俺は決意を固め、湖に入る。そして、だんだんと腰、首と侵食される。剣の重さを加え、ゆっくりとでも進みながらあと少しとこりで、足が滑つた。……いや、違つた。地面が消えた。足元にあるはずの土が消えた。突然のことに戸惑いながら、なんとか首だけを水面上にだそうとするものの、服の重さと剣の重さでうまく泳げない。しかし、なんとか泳いで岸に手をかけようとした瞬間

「うわっ！」

何かに足が引っ張られた。俺は湖の中に引き込まれ、なんとか上へ上がるとするも足を引く力は強く、下へ落ちる一方だつた。俺は足を引っ張つているものを外そと引つ張つているものを見た瞬間、口から息が全部出てしまつた。そこにいたのは影であり、その後ろには底の見えない暗闇。その光景はまるで死神が冥界へと連れて行つているように見えた。俺は必死でもがきながら足を掴んでいる影の手を外そうとするが、全く動かない。そしてとうとう、俺の息はもたずに気を失つた。

始まり

「……………い…………え…………！」

誰かの声が聞こえる。男性の声だ。

「おい！聞こえるかい！？おい！」

ゆづくと田を開けると、田の前には必死なアリューさんの顔があつた。

「よかつた。」

「…………あれ？…………」」は？」「

確か、俺は影に湖に引き込まれたはず。周りを見渡してみると、周りには木があり、まるでアリューさんと別れたところ。……いや、おそらく、アリューさんと別れたその場所なのだろう

「帰つて来ないから心配になつて来てみたらここに倒れてたんだ。何をしていたんだい？」

アリューさんが怪しむように俺の方を見てくる。……どう言えればいいんだろう？影に意味の分からぬといひに連れて行かれた？いや、そんなことを言つても信じて貰えないだろう。……いや、そもそもあれは夢だったのかもしれない。

「まあいい。無事でよかつた」

アリューさんは困つてゐる俺を見るといひに、立ち上がつた

「とりあえず帰ろ。歩けるかい？」

「はい」

俺は立ち上がりつとして……後ろに倒れてしまつた

「どうしたんだい？……て、なんだい、その剣は？」

「え？」

そう言われて後ろを見ると、俺は剣を背負つてゐた。鎧びた剣をベルトで体に固定して担いでいた。……つまり、さつきまでのことは夢じやないつてことか。

「それにしても、凄い鎧びだな」

アリューさんが興味深そうに剣を見る。

「……奥で落ちていたのを拾つたんです」

俺は本当のことを伝えることもできないのでそう答え、立ち上がって歩き出した。アリューさんもそれ以上を聞かず、一緒に歩き出した

帰つてからの問題は一つだつた。夏海を助けに行くか、このまま帰るか。昨日までは夏海を助ける考えに搖るぎはなかつた。けど、さつきのことがあつてから考えてみた。今まで何人の人が夏海を助けられなかつた。それなのに、俺みたいななんでもない一般人が助けられるのか？影に会つたとき、怖さで全く動けなかつた。もしあれが有害な者だつた場合、俺は確実に死んでいた。それならこのまま帰つた方が命の危険もない。アリューさんもセントラル・シティには行つて欲しくないみたいだし、この家にしばらくは置いてくれるだろう。そのままゆっくりと帰る方法を考えればいい。

少しの間、考え込んでから笑いが込み上げてきた。ここにいたからといって、確実に帰る方法が分かるわけじゃない。それに、帰る方法を探している間に何回夏海を見る？月に一度の披露式。それを見るたびに助けに行きたくなるか、見捨てた自分を殺したくなるだろう。帰れたとしても、向こうの世界で嘆き続けるだろう。なら……死んでもいいから助けるべきだ。悲観的な考え方をすれば、あのときの夏海は全てを諦めてるような田だつた。幸せなどないのだろう。だから、俺が会えずに死んでも夏海はこのままの生活を続けるだけだ。余計な悲しみも希望も与えることはない。

俺は決心すると、アリューさんに行くことを伝えた。アリューさんは残念そうな顔をしたけれど、結局は自分は止める権利はないと言い、許可した。明日の昼、この村の南の船着場に船が来るらしい。それを逃すと1週間は来ないらしいので、ある意味丁度いいタイミングだ。

昼、船着場に船がやってきた。見送りはアリューさんだけ。元々2日しかいなかつたし、アリューさん以外と交流をもつていない。

俺は鎧びた剣を抱ぎ、左の腰にはアリューさんがくれた刀が刺さっていた。アリューさんの家の家宝らしく、俺は断つたのだけど、アリューさんに使い道はないらしいし、背中の鎧びた剣では戦えないだろうとくれたのだ。もちろん、この鎧びた剣を捨てるつもりはないので背負っている。もしかしたら何かに使えるかもしれない。

「それじゃあ、行つてきます

「ああ。生きて帰つてくれよ」

アリューさんに挨拶をすると、俺はそのまま船に乗り込んだ。船が出るまであと数分。あまりダラダラとはできないし、たつた2日の関係。話すこともあまりない。

船は簡単な作りだつた。簡単な作りといつても、大きさ自体は凄く大きかつた。まるで豪華客船と間違つほどだつた。アリューさんが言うには、この船は他の大陸全てを回るらしい。他の船は大きな大陸だけで、週に一度のこの船はこの村のあるファー・ディスト・アイランドを含む小さな大陸も回る。だから何日もいろいろなところを航海するので、自然と大きさも大きくなり、客にも1人1部屋とまでいかないまでも、3人1部屋となつている。ただ、この船の特徴はもう一つあって、ソフィア様奪還作戦の者はお金を払わなくていいらしい。それについてはアリューさんにこれ以上負担をかけなくてホッとしたが、4人1部屋の部屋に泊まることになつてしまつた。それも男女混合。

「えつと……初めてまして。ライとおもいます。よろしくお願ひします」
部屋は思ったより大きい。ベットが4つあるくせにソファーなどの家具すら揃つていて、そこらのホテルと同じくらいの充実感はある。

ただ問題はルームメイト。俺が挨拶をするのに躊躇つた理由。第一に、俺を除いて男性は2人。女性は1人。

1人の男性は無表情だ。というより、いつも怒つているような顔。白髪で年は2、30代だろう。座つてるので正確には分からぬが、長身で睨まれてもしたらそこらの不良なら一瞬で逃げるだろう。

そして、最も恐ろしいのが背中の剣。その剣は『W』の形に置んで背中に背負っていた。もしアレが一直線に伸びたなら、大人2人分ほどの長さにはなるだろう。

女性の方もまた無表情で剣の整備をしていた。青い髪で顔は一般的な身長、ぐらい。特に鍛えているようには見えないが、なんとなく熟練者のよつた雰囲気を出していた。おそらく年は20代。整備している剣はさつきの男の剣どころか、俺の剣と比べても少し小さく、2本持つている」とから、おそらく一刀流なのだろう

もう1人の男性は違つ意味で怖かつた。今までの2人で作られる暗く重い雰囲気の中、ニヤニヤしながらチョコののようなものを食べながら俺の方を見ている。赤い髪でニヤニヤしているとはいえば、まるで品定めをされているような感覚。背は俺と同じぐらいで、20代前半だろう。腰には左右にそれぞれ2丁づつ銃がホルダーに収められている。

110

その3人は喋ることもなく1人は無表情でソファーに座り黙つていて、1人はこれまた無表情に剣の整備をしていて、1人はニヤニヤとこつちを見続けている

一
え
つ
と

俺はどうすればいいのか分からずにただ立ち尽くしてしまつ。別にはしゃげと言う訳じゃないけど、ここは空氣は重たすぎる

「さあどうせこいつ、

突然、「ヤヤヤしてるだけだった男がそう言つてきた。声は思つた以上に若く、もしかしたら俺と同じ年ぐらいなのかもしれない」「あ、ああ。ようしく。他の2人は？」

俺はその勢いをなくさないために、すぐに他の2人に話しかけた
「クリス」
「アラン」

1人が話してくれたからなのか、残りの2人も無表情で動作は変わらないものの、ちゃんと名前を答えてくれた。女性の方がクリス。声からしてやはり30代くらいだろう。アランという男性の方は声が低く、30代もしくは40代かもしれない。ただ、肉体的には30代……いや、20代のようにも見えるほど鍛えている

「よひしく

俺はなるべく明るく言つたものの、名前以外を言つ氣はないのか再び沈黙と空氣の重たさが部屋を支配した。俺はどうすることもできず、とりあえずベットに座つた。部屋に一番近いベット以外は荷物が置かれていたので、俺のベットは一番手前。そこに座り込み、これからどうするべきかを考える。アリューさんの話では、この船で約2週間かけてセントラル・シティへ向かうらしい。直線で向かえばそう遠くないらしいけど、この船は全ての大陸を回るので自然と遠回りになつてしまふらしい。なら、初めにするのはこの3人との友好を深めることか？俺はもう一度3人を見渡してみた。クリスは1本目の整備を終えたのか、ベットの近くにある椅子に座つて、1本目の剣をベットに置き、2本目の剣の整備をしている。正直、何をしているのかは分からぬが、剣を眺めては軽く振り、地面と平行に構え、また眺めるの繰り返しを無表情でしている。アランはソファーで腕組みをしてただ真つ直ぐどこかを見つめている。視線の先には窓があり、外が見えるが、景色を見ているわけではなさそうだ。ヴィンセントはやはりニヤニヤしながら、今度はガムを噛みながらベットに座つて俺の方を見ている。……正直、この3人と友好を深められるのだろうか？

「…………ライ…………」

「え！？」

突然話しかけられた。話しかけてきたのはヴィンセント。今までニヤニヤしていながらも品定めをしていたような目だったにも関わらず、今はなぜか笑いを堪えてるような顔をしていた

「な、何？」

「あんさんは間違つとる」

「どうしたことだ？ 何を言つてゐるのだろうか、…………」
「何を言つてゐるのか分からんよつやけど…………あんさんはここに入ってきた時点で間違つた行動をしとるつてことや」

「どういつ…………ことだ…………？」

何か間違つた行動をしたか？ 僕はただたんに自己紹介をしただけだ。同じソフィア様奪還作戦をする仲間として当然の…………最低限のことじやないのか？

「はあ…………」

俺が全く分からずにはいる、ついには呆れてため息をついたかと思うと…………口の中にあつたガムを突然飛ばした。そのガムは一直線に俺の横を通り過ぎ、その先にあつたゴミ箱に入った

「な…………」

正直、凄いと思った。日常生活には全くの価値もないけれど、まるで『これが俺の実力だ』と言つてゐるような、まるでその腰の銃でも同じ…………いや、それ以上の正確さで打てると言つてゐるような気がした。事実、俺が一瞬ゴミ箱を見て再びヴィンセントの方へ振り向いた時には、いつの間にか両腰のホルダーから銃は抜かれ、2丁の銃口は俺の方向へ向いていた。そして、ヴィンセントの顔からニヤニヤは消えて、本気で殺す気のような目をしていた

「もし俺が敵なら…………あんさんは既に蜂の巣や

異常だと思った。いきなり銃を向けられるとは思つてなかつた。

この4人は仲間のはずだと思つていた

「仲間に武器を向けるわけがないって顔をしとるが……」
にいるから仲間つてわけじやないんや。裏切り者がいないなんて保障は誰ができるんや？」

そう言われればそうなのだが、そんなことを言えば全てが疑わしくなつてしまつ

「これは先輩からの忠告や。信じるなら信じるに値するだけのこと

を証明してから信じり。自己紹介なんてその先や」

ヴィンセントは未だに殺す氣の目で言つたかと思うと……突然『まあ、』と腰に銃をしまい、ニヤニヤ顔になつて話だした
「ライの場合は弱者なうえに考えてることが顔にでるんや。この2つで裏切りものではない、または裏切つてもすぐに殺せるつてことで信用するんやけどな」

ヴィンセントはニヤニヤ顔に戻つたが、顔にははつきりと裏切れ
ば容赦なく殺すと書いてある。信用するとは言つても、それは自分
を殺しはしないといつ信用。そして、殺されかけても、咄嗟の判断
だけで俺を殺し返すことができるほどの力の差を認識しているとい
うことだ。

「それに比べてそこの2人。クリスさんとアランさん……やつけ？
お2人さんは信用できへんな」

ヴィンセントはニヤニヤ顔のまま2人を見る。しかし、2人はそ
んなことは氣する様子はない。そしてヴィンセントはため息をまた1
つつき、自分のバックから何かを取り出そうとし……田にも留まら
ぬ早撃ちでアランに向けて弾を撃つた

「危ない！」

俺が叫ぶのと弾が壁に当たるのはほぼ同時だつたと思つ。しかし、アラン本人はそんなこと気にしないのか、全く気にせずに動かなかつた。弾が当たらないことが分かつたのか？

「……ヴィンセント。次は斬る」

アランは小さくそう言つたものの、静かな船内では思つた以上に音は伝わり、はつきりと殺氣を込めていたのが分かつた。もし俺本人に向けられていたなら確實に腰が抜けているだろう。しかし、ヴィンセント本人はそんなものは気にならないのか、全く動じずに既にバックの中を漁りながら「はいはい」と適当に返事をしていた。これからどうなるのだろうか。こんな異常者集団の中でも2週間暮らせるのだろうか

「まあライ。俺からすればあんな危険なオッサンや俺が撃つたのすら気にせずに整備するねえさんよりあんさんの方が安心して仲良くできるんや。よろしくな」

俺としてはヴィンセントもアランもクリスも危険人物に変わりはない。……けど、一応は俺に対し敵意を向けない……というより、向ける気さえ失せるほどの雑魚という認識なのだ。一定の距離を保つた仲は維持すべきだろう。それに、他の2人と比べて喋る方ではあるようなので、俺としてもやりやすい。

「それで、ライはなんでこんな作戦に参加するんや？」

前言撤回。2人と比べるまでもなく、喋りたがりのようだ。

「悪いけど、秘密だ」

ただ、だからと言つて夏海のことを話すわけにはいかない。話しても信じないだろうし、変に思われるのも嫌だ

「そうかそうか。まあ、何でもいいわ。どうせ失敗する作戦や。残り少ない命を大量虐殺して終わらせたいとか死ぬときは国を発展させてくれたソフィア様のために死にたいとかそういうのやろ？」

後者は当たらずも遠からずだ。夏海を助けたい。けれど、死ぬ気はない。

「ま、どちらが目的やとしても、他の目的やとしても、せつせと死んだらつまらんや。少しでもその腰の剣を使えるよつとするとんやな。そのヒヨロヒヨロな体じゃあすぐ死ぬわ」

まるでそんな姿もそれはそれで見るのが楽しみだという声でそう言つと、ヴィンセントはベットに横になり、すぐに寝息をたてはじ

めた

これからどうじょう。残りのアラン、クリスとは仲良くできそうもない。ヴィンセントに言われたように少しでも剣を振つておくか？確かにこより2階下に行けば奪還作戦に参加する人専用の訓練所があつたはずだ。

俺は立ち上るとドアを開けて部屋を出た。2人に声をかけようかと迷つたが、声をかけてもどうせ返事は来ないだろうと思い、黙つて出た。

目的の場所に着くと、予想していたのとは違う光景があつた。そこには人が1人入れるほどの球体がいくつも置いてあり、それら1つ1つに番号が振つてあつた。入り口近くに張つてある紙を読んでみると、説明は簡単だつた。

近くにある機械で登録し、今空いている所を確認。その後、その球体に入ると本人の情報が全てインプットされ、バーチャル世界に投影される。そこで戦う敵を設定し、戦う。ただそれだけだつた。安全に実践ができるというわけだ。もちろん、怪我を負えばそれと同等の痛み。即死の場合などは軽減されるが、あくまでも現実感を出すために痛みもなるべく再現されるらしい。

俺はすぐに空いてる機体を探し、それに入った。中は狭く、1人用の椅子が一つあり、楽にできるようになつていて。俺はそこに横になり、説明通りに準備をしていつた。すると、すぐにバーチャル世界に入れた。そこは何もない空間だつた。真つ暗で、まるで影と出会つた空間。それを思い出した瞬間寒気がしたのでとりあえず忘れることにした。

俺はまずは少しでも刀を使えるようにするために簡単な動物からやることにした。

「ウサギ、キツネ、ライオン、クマ、ニワトリ、ヒョウ、チーター」何でもいた。ただ、どれも微妙な気がする。ライオンやヒョウに勝てるわけないし、ウサギやキツネだと実践的じやない。凶暴性などを設定できるけど、やはり敵は人間。俺は敵の設定を人間にし、

いろいろ調べてみた。その中に自分と戦うことができる項目を発見した。これなら実践的だし、そこまで力の差はない。そう思い、まずはこれにした。地形は平らな草原にし、さっそく投影。投影すると暗闇は薄れていき、草原が広がった。俺は驚きと感動で辺りを見渡した。少し見とれていたが、土を蹴る音で我に返った。そこには鎧びた剣を背負い、腰に刀を差した少年……つまり俺がいた。俺は刀を抜く。刀は背中の剣より軽く、片手でもギリギリ扱えそうだ。しかし、俺は両手で構える。相手も両手で構え、こちらの出を窺っている。俺がどうしようか迷つていると、突然、向こうからかけてきた。俺は突然のことに戸惑いながらも振り下ろした刀を刀で受け止める。設定の段階で多少凶暴性を上げていたために、俺が来ないので向こうから来たのだろう。そしてその所為なのか、容赦なく刀を振り下ろしてきた。刀と刀はカチヤカチヤと音をたて、一向に離れない。……いや、むしろ近づいている。力は同じだけれど、体勢の問題ややる気の問題がある。俺は思いつきり力を込めて敵を押し返し、構え直す。敵も数歩バックステップをするとすぐに構える。今度はこっちから攻めようと走り出す。そして間合いに入った瞬間、思いつきり振り下ろす

ザクツ！

何かを刺す感触と音がする。一瞬、俺は人を刺したんだと認識し、吐き氣がした。しかし、すぐにその認識を改める。目の前にあるのは土だけ。そして土には俺の刀が刺さっている。突然、真隣で土の音がした。避けた。斬られる。敵を見る前にそう考え付き、前転するように前に飛び込む。その勢いで刀は地面から抜け、俺は1回転する。俺はすぐにさつきまでいた位置を確かめてみると、予想したとおりそこには刀が刺さっていた。アレなら、動かなければ真っ二つにされていただろう。思つた以上にこの刀は切れ味がいいようだ。俺はもう一度構えた。向こうは好戦的な設定なので、こっちが動かなければあっちが動くはず。なら、斬られる前にさつきの敵のように避け、思いつきり振り下ろして斬る。俺はすぐ避けられるように

重心を移動させながら注意する。そして、予想通りに敵はこちらへかけて来る。そして残り数メートルの瞬間、敵は刀を振り上げるとなどせず、そのまま間合いに入り、下から振り下ろすように斬りかかる。俺は初めから避けて振り下ろす氣でいたので自然と意識は刀を上げる方へいつており、咄嗟に行動したものの、腹の横に鋭い痛みが走った

「ぐつ……！」

これが斬られた時に痛みなんだと分かつた。一応は刀で受け止めたものの、体勢に無理があつたのか、敵の刃はお腹に当たっている。致命傷になりはしないが、今まで怪我などあまりしたことがないうえに、こんなところを斬られることなどなかつた。お腹を切られるというのは予想以上に痛く、痛みで手に力がうまく入らない。それに、やはり180度ほど回した腕に無理があるのか、手首の骨も折れそうな感覚がある。敵はそれを分かつてているのか、更に力を加えてくる。これ以上されれば本当に骨が折れるかもしれない。俺はそう思った瞬間、無意識に敵を蹴る。敵もそれを予想していなかつたのか、避けることもできずに蹴られ、仰向けに倒れる。俺はすでに息が上がつており、敵が起き上がつたときにようやく『起き上がる前に刀を刺せばよかつた』と思った。敵の方はまだまだ体力があるのか、息1つ乱していない。少し好戦的なだけで、ここまで本人と差ができるものなのだろうか。それとも相手は機械だからか？俺はもう一度構える。そして、なるべく全ての場合を想定する。しかし、敵がゆつくり考えることなど許すはずもなく、すぐに敵はかけて来る。離れることを忘れていた俺は一瞬で間合いに入られ、首目掛けで飛んでくる切つ先を驚いて見ることしかできなかつた

「がはつ……」

咽にありえないほど痛みが来た。死ぬ。そう思えるほど痛みだつた。俺は倒れ込み血を吐く

「『ほつ…』ほつ…」

しかし、死ぬことはなく、すぐに痛みは引いていく。

「はあっ！はあっ！」

首に手を当ててみる。手に血はつかない。けれど、俺の体のすぐ下には血に染まった草が大量にあった。乱れた息のまま前を見る。目の前には背を向け離れていく自分がいた。そして俺と一定の距離を取ったかと思うとこちらに向き直り、刀を構えた。おそらく、俺は戦闘不能と判断し初期位置……というより、設定距離まで離れたのだろう。俺は立ち上がり、刀を構える。流石にバーチャルの世界。俺が瀕死と判断するやいなやあがつていた息もすぐに回復し、元の万全の状態になつた。そして万全になつたと自分でも分かつた瞬間、敵はかけて来る

結局、俺は一度も勝てなかつた。合計で何回殺されたか分からない。覚えてるだけでも心臓を18回、首を6回、脳を3回刺された気がする。そのたびに死にそうな感覚を味わつた。もう夜は遅く、もう数時間で夜明けという時間だつた。しかし、別にこの船にルールなどない。食事は機械で作るので食べたいときに食べられる。働く必要はない。寝室は4人1部屋だけど、自分のベッドがあるので寝たいときに寝ればいい。だからこの時間まで練習しても問題はない。この後はぐっすり眠つて、起きたらもう一度やる。この時間までやつたかいがあるのか、少しだけ分かつことがある。当然のことながら、バーチャルの世界だろうとなんだろうが、俺は斬ることに躊躇いがあるのだ。もちろん、それは普通のことだけ、今はそれが邪魔なのだ。実践では本当に人の命を奪わなければならぬ。そうしなければ自分の命を奪われる。同室の3人。あの3人はおそらく、殺すことに迷いなどないのだろう。

俺は寝てるであろう3人を起こさないようにゆっくりと部屋に入つた。その瞬間

ザクツ

首の真横に何かが刃が刺さつた。その刃は未だに明るい部屋の端にあるソファーに座つたままのアランの手から伸びていて、首よりギリギリ1・2cm離れているだけだつた。

「…………」

俺はあまりの恐怖に動けず、何も言えずに黙つていた。入ると同時にこんなことになるなんて考えもしなかつたし、全員寝ていると思つたのだ。アランは入つてきたのが俺だと分かると、どうやっているのか振り上げるよう剣を上げると、その剣は一定間隔で折れていき、再び『W』の形になり、アランの背中に納まつた。そして、今になつて気づいたが攻撃こそしなかつたものの、ヴィンセントは

銃をこちらへ向け、クリスも剣を両手に構えてこちらへ向けていた。

「なんやライか。てつきり、敵が侵入して来たかと思ったのに」

ヴィンセントはあるで、敵じゃなくて残念とでも言いたげにそう言い、腰に銃をしまうとベットに横になつた。アランもいつの間にかソファーで腕組みをして同じ体勢に戻り、クリスも毛布を被り寝始めた。俺はしばらくその場を動けなかつたが、疲れのせいか、動けるようになつたあとはすぐにベットに入り、眠つてしまつた

起きた時には曇過ぎだつたと思う。時計などないので正確な時間は分からぬ。まあ、時間など分かつたところで何にもならないけど。回りを見渡してみると相変わらずアランはソファーに座つていた。しかし、ヴィンセントとクリスはどこにもいない。俺はとりあえず風呂に入ろうと、着替えなど（そういうものはアリューさんが用意してくれた）を持つて部屋を出た。浴場は広く、この船は動くホテルのように思えた。風呂から出て部屋に入ろうとノブに手をかけた瞬間、昨夜のことを思い出した。もしこのまま開けて入れば、また昨日と同じ日に合うかもしれない。俺は少し考え、ノブを回し、引いて開けると同時に自分もドアと一緒に移動した。俺はソオツと中を見てみると、特に剣を取り出した様子もなくアランはソファーに座つていて、とりあえず安心した。俺はそのまま中に入り、剣などを用意する。まだお腹は空いていないので何か食べる前に訓練をしようと思つたからだ。

それから向こうに着くまではずっと同じことを繰り返していた。おかげで多少は戦えるよになつたものの、一度も……いや、一撃すら当たられないまま目的地についてしまつた

セントラル・シティーは思ったより大きく、ファーディスト・アーランドとの印象の差が大きかつた。まるで田んぼばかりの田舎から大都会へ來た感じ。建物は当然コンクリート製で、ビルのやうなものまである。一見すれば、元の世界に戻つて來たような錯覚を覚える。俺が景色を見ている間にも同室だつた3人はスタスタと歩いていく。結局、あれ以降も話したのはヴィンセントとだけで、アラ

ンともクリスとも話をしなかつた。まあ、ヴィンセントとも話をしだだけで、個人的なことなど何一つ分からなかつた。

3人は町の中心に向かつているようで、大きな道を真っ直ぐ歩いていく。俺達以外に剣や銃を装備した人は回りに見当たらず、結構目立つていたが、3人はそんなことを気にした様子もなく、どんどん歩いていく。俺はその数歩後ろを歩く。数分歩くと目の前に大きな城が見えてきた。俺は思わず立ち止まる。見ただけで、ここで一番偉い人が住んでると分かる作り。ここが作戦の本拠地。俺はそう直感し、手に力が籠る。ここから始まる。これからどうなるかは分からぬけど、成功したときには隣に夏海がいる。ただそれだけは分かつっていた。

3人は止まることなく、いつの間にか扉を開けて入つていくのが見えた。俺は慌てて追いかけ、直前で閉まつた扉を再び開け、中に入る。中は外見と同じように豪華で広かつた。……ただ、中には誰もいなかつた。これだけ大きな屋敷なのに、使用人らしき人が1人もいないので。3人はそれでも歩いていく。まるでどこへ行けばいいのか分かつてているかのように。もしかしたら、この世界で生まれた人なら誰でも知つてることなのかもしれないが、俺は戸惑いながら3人に続く。3階まで上がり、ある部屋の前まで来た。その部屋は他の部屋とは違つ雰囲気が漂つっていた。3人は初めてそこで立ち止まる。アランは2回だけ部屋を叩き、扉を開けた。部屋の中はどこかの社長室のようで、机の向こうの椅子には男の人人が座つて、俺達の入室に驚いていたようだつた。

「君達は……？」

「ソフィア様奪還作戦に参加しに来たんや」

ヴィンセントがアランの前に出て、そう言つた。男はその言葉を聞くと、どこか悲しそうな顔をしながら言つた

「その作戦は……もうないんだ。」

一瞬、男がなんと言つたのか理解できなかつた。奪還作戦が……もうない?

「どうしたことや？」

後ろからだから分からぬが、アランとクリスは全く動搖した様子はなかつた。だが、ヴィンセントだけは違つた。後ろの俺にすら分かるほど殺氣をヴィンセントは出し、男に聞いた。男はその殺氣に怯えているのか、突然震えながら喋りだした

「あまりにも死者が多すぎて、中止になつたんだ。だから悪いことは言わない。帰りなさい」

「船はあるのか？」

男の言葉に、今度はアランが口を出した。けど、船があるかどうかなど聞いてどうするんだ？……まさか自力で行く気なのか？男もすぐにそれに気づいたのか、必死で頭を横に振る

「市長さん。大人しく船を出してくれへんか？」

ヴィンセントまで自力で行く気なのか、殺氣を出しながら市長と呼ばれた男の方へ詰め寄る。そこまでして、なんでヴィンセントとアランはソフィア様のところまで行きたいのだろうか？

「……だが、これ以上死者を出すわけには……」

「安心せい。わいらはただ、自分の意思でセシルムへ行くんや。作戦は関係ない。」

「……2人はどうしてそんなにもソフィア様のところに行きたいんだ？」

「我慢できず、とうとう聞いた。もちろん、答えてくれるとは思つていなかつたけれど、そこまでして夏海に会いたい理由が分からなかつた。

「……そういうワイはなんでソフィア様に会いたいんや？」

予想したとおり、ヴィンセントは振り返り、そう聞き返した。けれど、俺は答えられない。答えるも得はなく、損しかない。

「答えられない」

俺はヴィンセントを見つめたままそつ返した。しばらく、ヴィンセントと睨み合つ形になつたが、とうとうヴィンセントはどうでもよくなつたのか、再び市長の方に向き直り、船のことを頼みだした。

数分後、ついに市長は折れ、4人が乗れる大きさの船を貸してくれることになった。その船は大型とは言わないものの、小型よりも大き目で、4人が横になつても十分な大きさだが、なんと帆船だった。俺は心配になつたものの、ヴィンセントは「まあ、コンパスと地図があるんやから、なんとか辿り付けるやろ」と楽観的だった。アランもクリスも何も言つことなく乗り込み、心配なまま出港してしまつた。作戦があつた頃にはセシルムまで3日掛かつたらしい。市長の優しさゆえか、食料は7日分積んでくれていて、多少迷つても食料は持つだろう。……ただ問題は

「…………」

「…………（ニヤニヤ）」

相変わらず黙つている2人と、俺を見てニヤニヤするヴィンセント。まあ、ヴィンセントはまた俺が不安になつてゐるのを楽しんでいるだけかもしれないけれど、アランは船の端に座つて黙つてゐ、クリスは剣の手入れをすることもなく、アランとは反対側の端で横になつてゐる。なので、自然と俺とヴィンセントは中心付近に座ることとなつた。十分ほど過ぎた頃、不意にヴィンセントは口を開いた

「なあ、ライ。あんさんはどこから來たんや？」

「え？」

突然の質問だったので、理解できなかつた。少し時間が経つても、未だに理解できない。どこから來た？俺は質問の意味が分からず、ワインセントを見つめ返すことになつた

「あんさん、ファーディスト・アイランドから乗つたようやけビ、ファーディストの出身やないやろ？」

確かにファーディスト・アイランドの出身ではない。……けど、なんでそんな質問を今するんだ？

「……なんでそんなことを聞くんだ？」

「俺は思つたままのことを口にした

「ライ。あんさんはどうにもおかしいんや。ファーディストはその名の通り『最果て』。せやけど、例えファー・ディスト出身でも、セントラルを見たことがない人なんてあるわけないんや。なのに、あんさんはセントラルに来たとき驚いとつた。……あんさん、ほんまは何者や？」

ヴィンセントの目つきが急に鋭くなつた。まるで、突然目の前の俺が敵になつたかのようだ。どうする？ 答えるべきか？ けど、今それを言って信じてもらえるのか？

「……話さないといけないのか？」

結局、俺はヴィンセントの顔色を窺つ質問をした。これで銃を向けられるようなことがあれば喋らなければならぬだらう。逆に、諦めてくれるなら助かる。

「いや、話さんでええよ」

俺はヴィンセントの言葉にホッとして、クリスと同じように寝てしまおうかと横にならうとした瞬間、ヴィンセントの「それに、お客さんを待たしたらあかんしな」という言葉で停止してしまつた

「……お客？」

なんのことだらう？ ク里斯は寝てるし、アランは黙つて座つてゐだけ。他に誰もいない。当然だ。ここはもう海の上。町すら見えず、人が隠れる場所もない

「もうじき分かる」

しかし、ヴィンセントは笑うだけで、何も答えてくれない。……けど。数分後、確かにお客が誰なのか分かつた。

突然、なんの前触れもなく海が揺れだした。いや、船が揺れだした

「うわっ！」

俺は突然のことに戸惑いながら、船にしがみつく

「お客さんの到着や」

ヴィンセントは未だに笑いながら、銃を両手に持つ。いつの間に

か起きたクリスも剣を両手に握り、アランも背中の剣を真つ直ぐに伸ばし、辺りを見渡す。もしかして敵が来たのか？こんな海の真ん中で？そう思ったものの、辺りには何もない。一面、揺れる海だけ。

「何が起きてるんだ！？」

俺は全く納まらない揺れに翻弄されながら、ヴィンセントへ聞いた。だが、聞くまでもなく、その正体が分かった。確かに敵はいたのだ。海面という死角の中に……。

それは巨大な蛇のような怪物……リバイアサンだった。まだまだ遠くにいるはずなのに、それでもその巨大さが分かるほどの大さ。そして、リバイアサンは縦にうねるように移動しながら、頭を出したり沈めたりし、この船の周りを泳ぎだした

「羽のあるトカゲが出るってのは聞いたことがあるけど、こないな大きな蛇は聞いたことがないな」

ヴィンセントは驚いていたよつたことを口にしながらも、銃をリバイアサンに向ける。そして、リバイアサンが頭を出した瞬間に、正確に撃つた。ヴィンセントの弾は船で見たように正確にリバイアサンの頭に当たり、悲鳴を上げた。しかし、数秒その場で頭を振つたかと思うと、急にこちらへ頭を向け、突進してきた

「こりややばいな」

ヴィンセントは焦ったように「そう言い、再び銃を構える。けど、俺でも分かる。いくら銃を撃つても止めるとは絶対にできない。どうすればいい

「ヴィンセント、もう片方の頭を撃つて」

「え？」

突然、横から声が飛んできた。声は小さく、空耳かもと思える声だつたが、すぐにクリスが言つたのだと分かった。

「了解」

ヴィンセントも聞こえたのか、すぐに銃をリバイアサンの頭に向ける。クリスはその間に帆を畳みながら、アランにも指示を出す。アラン、あの怪物の体勢を崩すから、峰で思いつき怪物を叩い

て

「分かつた」

クリスは2人に指示を出すと、自分は左手の剣をしまい、右手に剣を握り、振りかぶれるように姿勢を変える。まるでバットを振るよう

うに

「ちょ、ちょっと待つて！何をする気なんだ！？」

アランもヴィンセントもまるで何をするのか理解しているように行動しているが、俺には全く理解ができない

「黙つて。今まで以上に揺れるから貴方は船にしがみ付いてなさい」

そう言われ、再び反論しようとしたが、次の瞬間には行動は始まっていた。まずヴィンセントがリバイアサンに向かって銃を撃つた。その弾は当然のように日に当たり、リバイアサンは暴れだした。しかし、こちらへ向かってきていたせいでリバイアサンは止まることなくこちらへ向かってきていて、このままではやはりぶつかってしまう。しかし、ヴィンセントが弾を撃つた瞬間にはクリスの攻撃が始まっていた。クリスが剣を思いつきり振った瞬間、俺の剣より短い剣が伸びた。……いや、正確には伸びたのではないのかもしれない。クリスが剣を振った瞬間 ジヤラララララ という、鎖の音が響き、リバイアサンに向かって剣が一直線に伸びていく。……しかし、その剣先はリバイアサンには当たらなかつた。ここからでも明らかに外れたことが分かる程だつた。もうリバイアサンは日の前まで迫り、俺は死ぬんだと思った。……けれど、クリスは相変わらず無表情に……剣を更に振りぬいた。すると外れたはずの剣先はリバイアサンにぶつかり、わずかに軌道を変えた。しかし、まだまだリバイアサンの進行方向にこの船があることは間違いない。俺は咄嗟にアランを見た。最後、クリスはアランに峰で思いつきり叩くよう言つた。……それはもしかして、斬るのではなく、その力で船を無理矢理動かそうとしているんじゃないか？ そう頭を過ぎたときには反射的に船にしがみ付き、振動に耐えられるよう構えた。いつの

間にかヴィンセントもクリスも揺れに備えていて、アランだけが立ち、迫つてくるリバイアサンの方を見つめていた。そしてアランは手に持つた長剣をクリスのように両手で構え、バットを振るよう構える。……そしてついにリバイアサンが目前に迫つた瞬間

「ふんっ！」

目にも留まらぬほどのスピードで剣をリバイアサンに叩き付けた。いや、正確には何をしたのかは分からなかつた。アランが振つたと思つた瞬間、体が吹き飛びそうな感覚と共に、景色が飛んだ。俺は叫び声を上げることもできず、水が跳ねる バシャツ！バシャツ！という音を聞いていた。しばらくすると船はドンドンゆっくりになり、ついには止まつた。恐る恐る頭を上げ、さつきまでいた方向へ頭を向けると、まだ海に横たわる巨大な物体が見えていた

「怪物が起きる前に行こか」

さつきまであんなことがあつたにも関わらず、ヴィンセントはすでに笑つている顔に戻り、帆を下げだした。俺はそんなヴィンセントを少し羨ましく思いながらも、他の2人の様子を確認して驚いた。他の2人はいつも通り無表情で、どこも疲れた様子がないのだ。まるでそれが日常でもあるかのように、クリスは再び横になり、アランは刃こぼれがないか確かめているのか、座つて剣を眺めていた

数時間後。船は大きな島に着いた。その島は森に覆われていて、中がどうなつているのかが全く分からなかつた。大きさも『とにかく大きい』としか言いようのないほど大きく、一度森に入れば地図やコンパス無しでは帰つてこられないように思えた。

船が島の浜辺に着くと3人に続いて船を降りた。船を降りて数歩歩けば森の中。そんな危険な場所。本当にこんなところに夏海がいるのだろうか？一瞬、このまま帰つた方がいいのかもしれないと思つたが、すぐに思い直した。

「……さて」

ヴィンセントは一番に船を降り、辺りをグルッと見渡すと、振り返り言つた

「ここ今まで来たはええものの、これはもう集団での奪還作戦やないんや。わいも含めて全員、ここへ来たのは訳ありみたいやからな。どうや？ ここからは別行動にせんか？」

突然の提案だった。

「ヴィンセント。そやは言つても、中に何があるか分からな

「そうだな」

「いいわよ」

しかし、俺の言葉は遮られ、アランとクリスもその提案に乗つた。

「……じゃあ、そういうことや、ライ。ここからは単独行動や。幸い、地図もコンパスも4人分あるんや」

ヴィンセントはコンパスと地図を俺たちに1つずつ放り投げた。

「じゃあ、わいは先行くで」

ヴィンセントは言つだけ言つと、止める間もなく、サッサと歩いて行つてしまつた。アランとクリスはヴィンセントを一度見ただけで、3人とも違う方向へ歩き出した。俺はどうしたらいいかも分からず、少しの間立ちつくしていたが、ようやく森に入る決心をし、

とりあえず森の中心を田舎して歩き出した。

森の中は薄暗く、まるで樹海だつた。立つてゐる木が普通の木ならここまで薄暗くはならないだろうが、立つてゐる木の1本1本が大樹であり、根だけでも大人ほどの太さの2倍はゆうにあつた。俺はそれを1つ1つ越えながら中心を目指す。

……どれだけ歩いただろうか？時計など持つていなし、木のせいで太陽も見えない。できればこのまま何事もなく夏海の所へ着きたい、そう思った瞬間

バキッ！

近くで枝が折れる音がした。咄嗟と、そこにはなんとライオンがいた。

「マジかよ」

リバイアサンがいた以上、森にライオンが出てもおかしくはない。
むしろ、至つて普通に思える。……が、だからといって怖くないわけではない。勝てるわけではない。いや、正確には怖いが、勝てるかどうかは不明だ。勝てるかもしない。船での修行の際、何度か戦つたことはある。……が、勝てたのは数回ほど。しかも、無傷での勝利など一度も無い。軽くて骨折レベルの怪我は負つた。

……けど、逃げられる状況ではないことは分かりきっている。俺は腰の刀を抜いた。本物の刀を使うのは初めてだが、シミュレートでは何度も使った刀。俺は刀を構え、襲ってくるのを待つ。今の俺の身体能力では、こちらから攻めてもカウンターに合う確立が高いことは分かつっていた。だから、むしろ敵に襲わせ、それを回避したうえでこちらがカウンターを当てる方が何倍もいい。

ライオンは警戒しているのか、俺とは一定の距離を開き、ゆっくりと俺を中心に円状に動く。俺はいつでも動けるように片足を軸に、ライオンに体を向ける。

ただ円を描くだけで、半円ほどライオンが動いた瞬間

ガオヽヽヽツ！

ライオンが飛び掛ってきた。俺はさつきまでと同じように片足を軸

に体を捻り、ライオンの軌道からズレると同時に、ライオンの体を横に斬るように刀を振るう

ガオ～～～ツ！

ライオンは避けられるとは思つていなかつたのか、体を斬られバランスを失い、地面に顔から激突し、暴れまわる。俺は再び距離を取り、構える。

未だに暴れまわつてゐるライオンを見ていくらか余裕ができたのか、手が振るえていないことに気がついた。刀には血が付いている。目の前には一撃で俺を殺せる動物がいる。それだけでも怖くて動けなかつたり、動物を斬つた衝撃で震えてもおかしくないのに、俺の体は全く震えていなかつた。シミュレーションでは、確かに斬れば血はでた。もしかしたらそのおかげなのかもしないが、なんとなく……なんとなく、自分が冷酷な人間になつてゐる気がして悲しかつた。

そして、そんなことを考えていたせいか、いつの間にかライオンが静かになつてゐることに気がつかなかつた。気がついたときにはライオンの姿は消え、すぐに辺りを見渡したときには、後ろから飛び掛られる直前だつた。俺は慣れた動作など気にする余裕もなく、反射だけでライオンの攻撃を回避しようと体を捻つた……だが

タツ

ライオンは俺の目の前で着地したかと思うと、その場で方向を変え、腹に噛み付いた

「ああああああ！」

噛まれると同時に押し倒され、背中の衝撃と腹の痛みのせいで口から叫び声がでた。一瞬、この叫びのおかげで3人の誰かが助けに来てくれるという希望も持つたが、すぐにそれを搔き消す。例え助けに来たとしても、それまでに俺は肉片になつてゐるだろう。俺はなんとか手放さずに済んでいた刀を握り、思いつきりライオンの顔へ横から刺した。

ガオ～～～ツ！

刺した瞬間、ライオンは今まで以上の叫びを上げたかと思つと、力尽きたように倒れこんできた。

「ツ！ ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！」

叫び声のおかげで腹からキバは抜けたが、出血が酷かつた。このままだと確実に死ぬ。素人目にも分かるほどの中血。意識も朦朧としてきた。死の直前の走馬灯なのか、ここまでのことや夏海のことが頭を過ぎつた。

そして最後に体が認識したのは……影だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8572z/>

夢見る少女と最果ての少年

2012年1月5日18時28分発行